いつかどこかの俺の世界【影】

世空　心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつかどこかの俺の世界【影】

【Ｎコード】
Ｎ７４０４Ｙ

【作者名】
世空　心

【あらすじ】
それは夢の中の出来事だった。どこからか響いてくる歌。それを聞いて歌いだした自分は、気づいて目が覚めると見知らぬ場所に居た。その目の前には一人の少女。「お願い！助けて！私たちを助けて！」　神の影たる一人の少年と、世界を知ろうと生きる一人の少女を中心に送る物語。　本編の裏にあたる番外に近い立ち位置の作品です。

断章・夢の中

それは夢だった。

俺は見渡す限りの草原の上に寝そべって、早く流れていく雲井を見ている。通り過ぎていく風の感触が異様に生々しく感じられた。

夢の中に居る自分が、今を夢と認識できる――それは難しいことではないけれど、でもそれは確かに可能なこと。現に今の俺も、ここが夢であると認識できている。夢の中で、俺はただ空を眺めていた。別段、何をしようという気にも、なれない。

「夢の中でも……空は綺麗だな」

腕を伸ばして、雲を掴まんとするように手のひらを開いてみせる。視界一面に広がりを見せる青空は、遠近感を狂わせて、雲に手が届くような、そんな錯覚をもたらした。

そうして空を眺めていると、不意に、風に乗って旋律が流れてきた。俺は風が吹く方向に、視線を向けてみる。少しばかり背丈のある草たちが視界を遮るせいでよくは見えないが、誰かが遠く向こうで歌を歌っているということが、理解できた。

そのメロディーに、どこか既視感を覚える。緩やかで遅い旋律、ゆっくりと歩みを進めていくような、そんなイメージ。ふと、途中まで聞いたところで俺はその正体に気づいた。

「あぁ、あれだ……ドヴォルザークの‘新世界より’の第二楽章だ」

家路だとか遠き山に日は落ちてだとか、歌の旋律にもよく用いられることがあるなじみ深い曲。昔はよく聞いてたな、なんて、そんなことを思い返していた。

「あぁ……なんだろう、こう、聞いてると何か歌いたくなってくるな……」

風に乗って聞こえてくる曲に触発されてか、俺は無性に歌いたいという欲求に駆られる。草に寝そべったまま大きく背伸びをして、深く何度か深呼吸を繰り返すと、そのままの姿勢で歌い始める。

「今はまだ夢の中、あの日の空を夢見てる――――」

思いついた歌詞を、思いついた旋律で並べてみる。そこにどうしても既視感が漂っているように感じてしまうのは、やはり記憶の中にある曲から旋律を集めてきてしまうからだろうか――――そんなことを考える。

『その中でいつまでも、ずっと空を眺めてた――――』

二つ目のフレーズを口ずさんだとき、ふとそこに、別の声が重なったような気がした。少女の声であると、即座に自分は判断する。

『風に撫でられ目覚めると、まだ空を見上げてる――――』

歌いながらも、周囲に視線を配ってみると、丁度斜め後方のあたりに、白い人影が見えた。こっちの方を向いているようで、長い髪が風に靡いている様が非常に映えていた。黄金に輝く、綺麗な色だった。

『どこから夢であったのか、それを知ることは無理だから――――』

すぐに視線を元に戻して、空を見上げる。歌いながら、自然に口元が緩んでいた。夢の中に見知らぬ少女をつくりだす、そうまでし

て俺は、誰かと歌いたかったのかな――――そんなことを考える。

『ただ風の音に耳澄ます――――』

少し、間を置いた。流れる風に靡く草。目を閉じて鮮明に聞こえてくる自然の音楽に、少しばかり思いを馳せてみる。何を思ったかは、正直自分でも分からない。

ゆっくりと目を開いて、続きを語った。

『風に運ばれるその歌は、遠い故郷の童歌――――』

そして俺は、続きを歌い上げる間もなく強烈な光に包まれる。草原も青空も風も音も、全てが降り注ぐ白い光に染め上げられる。自分の姿も認識できないようなそんな強烈な光の中で、俺は強く目を瞑った。

そして暫くして、瞼の裏からその光が失せる。同時に戻る、音と肌の感覚。

俺は恐る恐る、目を開いてみた。

すると目の前には、白装束に身を包んだ金紗の髪を持つ少女が居た。

「……」

理解できないその状況に、俺はただ呆然とするばかりだった。

オープニング「影の君、硝子の私、鳥の貴女」（前書き）

以前投稿したものとはあまり文章を変えていません。連載当初故に稚拙さが目立つ部分もあるでしょうが、ご了承。

オープニング「影の君、硝子の私、鳥の貴女」

『Ａｒｎａ・Ａｍａｌｔｉａ　（アルナ・アマルティア）』
導師と呼ばれる、魔術師としては最高峰に位置する称号を、最年少で与えられた少女。‘塔（タワー）’と称される、魔術師たちの協会より与えられる称号で、それは多くの魔術師が夢見る地位でもある。
若くして数々の理論をつくりあげ、古くから言われてきた魔術の基礎理論を覆す仮説を組み上げた、そんな少女である。
そんな天才の名が相応しい彼女に、ある一つの依頼が届いた。

「新しく発見された遺跡の……調査……ね」

それなりに豪奢な部屋……であったと思われる。シャンデリアが照らす下には、かろうじて足の踏み場が存在するだけの床。奥に鎮座する机の周辺には、多数の資料や失敗したと思われる文章が散らばっている。そこに、アルナ・アマルティアは居た。
白いチュニックに身をつつんだ少女。肩よりやや下まで伸ばされた髪は、白人でも少数のブロンドで、少しばかり上気し色づく白い肌が、力ある青色の眼と相まって彼女の元気の良さを表している。そんな彼女の目の前には、質感の良い紙に書かれた文章があった。

「ふぅん…面白そうね。意外とここから近いし…」

それは、‘塔’より寄せられたアルナへの遺跡調査依頼書。報酬の金額がその紙の下の方に書かれていて、それをつまらなそうに指でなぞる。頬杖をつきため息をはきながら、彼女はその要項に目を通していた。

‘遺跡’。それは神代から存在すると言われている古代の遺物。その形式は様々で、迷宮や魔術的に作られた仮想地下など――共通して今の人の技術とはことなる建造物などのことである。種こそ多岐にわたれど、秘文魔術と称されるようなものや様々な文の断片など、貴重な研究資料が碑石などに刻まれ残されているのである。

聖遺物などと呼ばれるような謎の物体が発見されることもあるが、それらは全て別組織である教会の管理下におかれることになっている。‘塔’としては自分たちの管理下において研究したいものだが、遺跡の調査などでは無償で護衛をしてくれる上、色々と事情が重なって強く言えないでいる。

「あまり読まないで返事しちゃったけど……護衛はいつも通り教会の騎士団ね……え、ここに迎えに来るの？　それももうすぐじゃない！」

そう言いながら、慌てて白地に金のラインの入ったローブを着るアルナ。背や左胸にあたる部分には、瞳をモチーフにしたエンブレムが刺繍されている。導師の称号を与えられた術士にのみ許された刺繍である。

導師のローブに身を包み、調査用の道具をそろえ終わった頃。玄関の方から人の呼ぶ声がした。

「あーるなさーん！！　迎えに来ましたよ！！」

――――――

もう幾分か顔見知りになった迎えの騎士達に付き添われ、たどりついた先は山中。岩肌だけが見える平地となった場所に彼女が現れると、ローブ姿の青年がその姿に気付いた。

「アルナ導師、お疲れ様です！」

純白のローブに身を包んだ少女導師。国どころか世界的にも有名な彼女のその特徴は、所見の相手にも正体が良く分かったようで、彼女の姿を認めてすぐにあいさつをする。

「お疲れ様。ここの遺跡の概要ぐらいの資料は出来上がっているかしら？」

挨拶を返し、その青年に質問をするアルナ。尊敬する導師に話しかけられ、彼は嬉しそうな様子で返事をする。

「はい！　ただいまお持ちいたします！」

元気のいい若手――それでもアルナよりは年上だが――が、最年少導師の指示を受けて元気のいい返事をする。かけていくローブ姿をみて、アルナはにこやかに言った。

「うんうん、若いのは元気でいいわね！」

「何言ってるの、アルナの方が若いでしょうに」

背後からかけられるから女性の声。アルナが振り返ってみると、そこには軽鎧を装備した女性が立っていた。

アルナよりはややくすんだ色合いのブロンドで、長い髪は一つの三つ編みに纏められている。背も妹より高く、その肉体は女性なが

ら鍛えられているのがよくわかり、引き締まった顔つきからは、お姉さんというよりも姐御というのがしっくり来るようだった。
その姿を認めると、アルナの表情に喜色が浮かび上がる。
「あ、お姉ちゃんのとこの騎士団の担当だったんだ、今回」
アルナの姉スティリア・アマルティア。教会騎士団に所属する槍騎士（ランサー）で、彼女もここ最近頭角を現してきている若手として、妹共々知名度がある。妹の姿を認めた、彼女とは対照的な姉は、野性的な笑みを浮かべた。
「何言ってるの。迎えに行ってたのはあたしのとこの団員でしょうが」
「お姉ちゃんこそ何言ってるのよ。誰のとこが担当でもお姉ちゃんのとこの人が来るでしょうに」
「そうだったっけ？」
妹の切り返しに、忘れていたと答え快活に笑う姉。殆どが男性の騎士団の中で数少ない女性であるスティリアは、幾つかある団の一つを束ねる騎士団長の一人だった。彼女たち騎士団長の上位には、総騎士団長が存在する。今は空席だが。
姉妹の談笑をしている内に、頼んでいた資料が届いた。そこに書かれた遺跡の見取り図を見て、アルナは眉を顰める。
「何よこれ？　これじゃあまるで巨大な魔方陣じゃない」
半径数十メートルにわたり、環状に碑石が並ぶことを示すスケッチが描かれている。恐らく飛べる使い魔を所有していた術者が視覚

共有を用いて書いたものだろう。

「……でも面白そうね」

アルナが知る限り…いや、塔（タワー）が知っている遺跡の中には、このようなものは存在しなかった。今までよりもずっと未知に包まれた遺跡の調査と知り、アルナの知識欲が加速する。

「あ、アルナ？　前々から言ってるけど、その笑い方不気味よ？」

「フフフフ…お姉ちゃん。これが笑わずにいられる？　未知の形式の遺跡よ？　しかもこの調査団で導師なのは私だけ…つまり調査の全権が私にあるのよ？　あぁ、楽しみだわ。一体どんな面白いものが出てくるのかしら？　ここ最近は爺ど―――先輩と合同が多かったもの、楽しみにせずにはいられないわ」

紙を見つめ不敵に笑うアルナ。少々引き気味のスティリア。そして資料を見つめているうち、あることに気付いたアルナが姉に問う。

「あら？　今回の護衛の騎士団の人数…百人？　お姉ちゃん、多すぎない、これ？」

この近辺で強力な魔獣の出現情報は無い。群れでなく二、三匹程度のこのあたりの魔獣では、（警備範囲は別として）目の前の姉一人で十分お釣りが来るのだ。なのに百人という今回の人数。それは余りにも不思議なものだった。

「あ、それなんだけどもね。何だか，例の研究施設，の廃墟が見つかったらしくってさ、そこの調査も今回は含まれてるのよ」

‘例の研究施設’その単語を聞いてアルナは表情を強張らせる。顔色も若干青ざめているようだ。

「う、嘘…お、お姉ちゃん、そこ堕噛（オチガミ）とか残ってたりしないよね？」

‘例の研究施設’と称されるもの。それは七年前の戦乱で使用された人造魔獣を製造したと思われる施設。国を跨いで様々な場所に点在し、その各所に人を兵器に転用する研究の資料が残されていた。極々稀に、戦乱で表に出てこなかった人造魔獣が施設に残っていたこともあり、戦乱が終わった直後も時折追加の戦死者が度々出ることがあった。

「何言ってるの。もうあれから七年、アレらだって生き物なんだから、その間施設に閉じ込められて生きている訳ないでしょうに」

妹の懸念は的外れだと、そう笑い飛ばすスティリア。アルナの方も、言われてみればそうだと姉の言葉を聞いて安心した表情になった。

その時、彼女達の頭頂部に冷たい感覚が走る。気になって視線を上げたスティリアの眼に、水滴が飛び込んできた。雨である。

「うひゃ！　雨！？」

「あっちゃ～、山の天気は変わりやすいものね…お姉ちゃん、仮設テントは何処？」

徐々に強まる雨の中、姉妹は他の魔術師や騎士達と共に、雨除けのため仮設されたテントエリアに向かっていった。

第一小節「オノレノ　ウレウ　べ」

「おいおい、雨が降りやがって来たぜ」

急に暗くなった空から、水滴が落ちてくる。
雨が降ってきたと、そういったのは‘例の研究施設’の調査に借り出されていた数名の魔術師と数十人の騎士団、の中の一人の騎士だった。

「あ～ぁ…とっととこんな調査終わらせて遺跡の調査団の方に合流しようぜ？　今日は姐御の妹さんが来てるらしいじゃねぇか。拝んどかねぇと損だぜ、ホント」

「なに！？　あのアルナ導師が来てるのかね！？」

騎士のぼやきに、近くに居た魔術師が反応を見せた。そして彼を中心に、周囲の魔術師と騎士団が少し騒がしくなる。

「おい貴様、姐御の妹君が来てるだなんて何故言わないのだ！」
「そうだ！　それを知っていれば、我々はもっと迅速に行動していたのですぞ！」

魔術師からしてみれば、純白のローブに輝く金紗の髪の、最年少の天才少女導師。騎士団の面々からしてみれば、敬愛する団長の可愛らしい実妹。双方の集団においてアイドルのような地位に居るアルナ。その訪問の報告（？）を怠った罰は重かった。周囲の殺意に似た感情の篭った視線を一心にぶつけられる。年長の騎士数名がその彼ににじり寄った。

「いや、え、なに…ハイ、ほ、ホントすいませんしたって…いやマジでや――――あ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「全く、貴様は何度言ったら分かるのだ？　妹君の訪問の報告は最優先事項だと我々の騎士団ではいつも言っていただろう？」

　若い騎士団員が、年長の騎士団にシメられる。沈黙した彼を他所に、一同は向き合う。無言で彼らは頷き合うと、言葉を交わさずに総意を纏め、その集団は足早に調査目標に足を進めた。

？？？？？？？？？？？？？？？？？？？

　一同がたどり着いたその地点には、岩肌に掘られたように彼らを出迎える大口の入り口と、やや黄色く色付いた光る霧が待ち受けていた。

「む、総員、マスクの装備か呼吸器系の魔術を行使せよ。ここは〝ミスト地帯〟だ」

　その場で指揮権限を持つ騎士が、皆にそのように指示を出す。騎士団は皆兜のフェイスガードを下ろし、魔術師達は緑色の魔石を取り出して魔術を唱えた。
　空気中に濃密度の魔力が存在していた場合、それらはそのエリアの属性色の色をまとって霧となって出現することが知られている。その濃密度の魔力を含む空気は人体には悪影響で、時には死者が出るほどだ。だが、これは簡単な処置を施したマスクの使用や魔術などで防ぐことが出来る。教会に限らずこの世界に存在する騎士団の兜には、このマスクの処置が標準で施されている。
　一同が進入した施設内は、外よりも濃密なミストで包まれていた。

施設内に入り、魔術師の人数と同じだけ班を分けて調査に入る。

「にしってもぶっきみだなぁ…ん？」

若い騎士団員は、施設のそう奥でもない場所にあるものを見つける。それは、結晶に閉じ込められた〝首の無い二メートル半ほどのヒトガタ〟だった。

「おいおいおいおいマジかよおい…」

彼は先輩騎士にこのことを報告するために、その場走り去った。残されたその結晶の中には、紅い光が灯り始めているのに、すぐに立ち去った若い騎士は気付くことが出来なかった。

？？？？？？？？？？？？？？

「あ～あぁ、折角これからだっていうのに……」

会議用の大きな天幕の内側から、外の雨模様を恨めしげにアルナは見つめていた。折角の調査が出鼻を挫かれた形になってしまったからである。

「ほらほらそんな顔しない、アルナ。折角の美人が台無しだゾ？」

眉を顰めるアルナのおでこを、人差し指でスティリアが突く。それでもアルナは、機嫌が悪そうに口を窄めるだけである。さらに言葉をつむごうと彼女が口を開いて？？？

その時、天幕に一人の男性が駆け込んできた。雨に濡れ、土に汚

れ、顔は息が上がっているにもかかわらず蒼白である。鎧も兜も打ち捨て身軽にしてここまで全力で疾走してきたと見受けられるその様子は、二人に事態がただ事では無い事を予感させた。

「あ、あ姐御！　大変です！」

「団長と呼べと言っているだろう！」

「今はそれどころじゃないですあね…団長殿！　己憂(コウベ)部です！　堕噛(オチガミ)です！」

その報告は、若い騎士団長を戦慄させ、その妹を恐怖させた。口早に、その若手の騎士は報告を続ける。砕けた口調と敬語が微妙に混じりおかしなものになっているが、彼の精神状態を考えると仕方ないものだった。実戦経験の少ない若手の騎士に、堕噛(オチガミ)の‘アレ’を受けて冷静になっていろというのが無理だというものだろう。

「結晶の中で仮死状態で生きてやがりました！　オレは装備を全部捨てて先行してきて、今はセンパイたちが足止めしつつコッチ来てます！」

その報告を受けて、スティリアは即座に行動に移った。若いながらも騎士に指示を飛ばすその姿は、アルナの目には普段の姉とは違って見えて、頼もしいものだった。

「お前は騎士を集めろ！　夜の番に備えて仮眠を取ってる奴らも叩き起こせ！　魔術師連中を中心に、陣を組むぞ！」

指示を出された騎士は再び外に駆けていく。そのテントエリアは、襲撃の報告に騒然となった。

その場に残っていた人員が集い終わった頃、彼らの耳に音が聞こえる。
それは湿った空気の中に似つかわしくない、乾いた、餓えた声だった。

「ｋａｔｕｋｅ　ｋａｔｕｋｅ，ｋｉｔｉｃｈｅｔｏ（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）……ｋａｔｕｋｅ　ｋａｔｕｋｅ，ｋｉｔｉｃｈｅｔｏ（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）…」
「ｋａｔｕｋｅ　ｋａｔｕｋｅ，ｋｉｔｉｃｈｅｔｏ（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）……ｋａｔｕｋｅ　ｋａｔｕｋｅ，ｋｉｔｉｃｈｅｔｏ（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）…」

七年前、多くの人が耳にしたであろう己憂部（コウベ）たちの声が聞こえてくる。それは一方から来るものではなく、全方位から聞こえてきた。

「姉御ぉ！！　既にここは包囲されています！　俺らは、見つかりました，！　じきにヤツも来ます！」

施設側の方向から、騎士と数人の魔術師の声が聞こえ、その姿を見せた。数十人だった一団は十数人にまでその数を減らしており、事の次第を暗示している。スティリアが声を張り上げた。

「団長と呼べ！！　総員、遺跡中央に向かえ、陣を組むぞ！　堕噛（オチガミ）は一度見つけた獲物は地の果てだろうと追い続ける！　この場で迎え撃つぞ！　魔術師達も御覚悟を！」

あえてその場に居なかった人員の行方は聞かない。堕噛（オチガミ）から逃れられなかったのならば、皆血の糧となりその体に塗りつけられていたことだろう。それが分かるからだ。故に他もそのことを言及しない、今は自身の命が最優先なのだ。

「己憂部（コウベ）…資料でしか見たことなかったけど、アレが、そうなのね」

岩の陰から蟻のように湧き出てくる己憂部（コウベ）たち。その膨れ上がった風船状の頭部と肋骨の浮き出た痩躯を目にして、アルナはそう呟いた。この場で最も年齢の低いアルナは、この場で唯一その姿を見たことがない者だった。最も、半数以上は堕噛（オチガミ）を見たことが無いが――

一団を取り囲むように、己憂部（コウベ）たちが円を描いて立ち止まる。本体を待っているのだ。

「不用意に手出しするな。本体だけに気を配っていればいい。無視しろ」

国軍や騎士団で使われた堕噛の俗称を用いて、スティリアはそのように指示を出す。堕噛（オチガミ）が来るであろう方向に騎士団が陣を取り、その後方に守られるように魔術師たちが集まる。その時分かったのだが、施設調査に向かった魔術師は奇跡的に全員が無事であったようだ。

騎士たちが各々の懐から十字架を出す。彼らを教会騎士団たらしめている武装、十字兵装（クロスウェポン）だ。

「Ｅｌ－ｏ－ａｕｓ，ａｈｓｉ　ｕｍｔ　ｄｅｓｔ（汝皆、灰と塵に還れ）」

合図も無く、揃った詠唱が行われる。光が広がり、それぞれの武器を形作った。剣・槍で構成されているが、比率的には槍の者が多い。そのフォルムは個人で差があるが、みな十字型を基本の意匠としている。

そして、間の前の己憂(コウベ)部の垣根が分けられる。本体が来たのだ。

「！！　流石に、キツイものだな…」

まだその姿が見えていないのにも関わらず、空気中の魔力を媒体に感情がぶつけられて来る。共振現象と呼ばれるそれに恐慌するものは居なかったが、雨で冷えるのもあいまって、皆総じてその身が強張る。

未だ姿を見せない敵に備え、スティリアが指示を出した。

「総員、青の魔石を出せ」

雨が降り注ぐこの天候では、水に由来する幻想の強度が増す。そんな魔術の基本知識を持ち合わせるスティリアは、その魔術の一斉射を試みようというのだ。

「頭無(ヘッドレス)しが近い。三節以下の射撃系の魔術を用意、目視と同時に一斉射を加える！」

雨の天候でもよく通る姉の声を聞いて、後方のアルナも魔石をローブの内側から取り出す。ローブは水滴を弾き、重くなることは無かったが、被ったフードの前面からぶつかる雨が、彼女の顔を濡らしていた。

魔石を左手に握り、身の丈近い杖はその先を前方に向けられる。左手の中で魔石は砕け、その粒子が杖の先に陣を描いていった。

「Ｏｌ　ｗｉｎｄｉｓｓａ，ｋｏｃｉｍ　ｃｈｅｋｉｍ　ｄｅｋｉｍ…ｘｒｅｓｓ　ｓｉｆｉｅａ（その水面(みなも)、固く硬く堅く…硝子と集え）」

実戦経験が少ないながらも、導師として高い実力を持つアルナが、最も早く詠唱を開始した。後に続くように、周囲の騎士・魔術師たちも詠唱を開始する。

「Ｓｉｋａｅ　ｔｕａｒｉ　ｎａｉａｍ…ｏｗ　ｚｅｅｎｅ　ｍｉｙｌ　ｄｏｉｎ　ｗｅｉａｓａ（透き通りなさい…そこに空を映しなさい）」

高圧に固められた水の塊が、魔方陣の先に形成されていく。幻想の水だけでなく、それにぶつかる実在の水も吸収しているようだった。

「Ａｌｖｉｓａ　ｄｉｏ　ｒａｍ，ｙｏｉｅ　ｔｉｍｉｌａ　ｋｕｍｕ　ｆｅｎｎｅｓｓａ（日が昇るまで、貴方は時を待ちなさい）」

誰よりも巨大な水槍が、誰よりも早く形成された。前に居る騎士達はその光景を見ることは出来ていないが、周囲の魔術師たちは導師たる実力を目の当たりにして、彼女に尊敬のまなざしを送っていた。

アルナの水槍の完成から三十秒、最後の水弾が完成して十五秒…堕噛（オチガミ）が姿を現した。

「Ｓｈｃｕｔｉｅａ（射れ）！」

スティリアの号令に従って、皆の魔術が一斉に襲い掛かる。

その刃先は、一つも違えず、反応出来ない堕噛（オチガミ）を捉えていた。

第二小節「共振現象」

多数の術師の手で作り出された多数の水槍。雨模様という、水の幻想を作り出すには最適な条件下で生み出されたそれは、全てが堕噛（オチガミ）を捉えていた。

いける――――皆の思考には共通してそのような思いが浮かんでいた、だが。

「え……嘘……」

全ての魔術が、ただ一つもその巨躯に届くことなく霧散したのだ。青い粒子の輝きを残してあっけなく消えていく魔術たちに、誰もが言葉を失っていた。アルナの驚愕の声が、小さいにも関わらず最前列のスティリアの耳にまで聞こえてくる。

「■■■◆◆■！！！」

「っく！？　総員散開！　魔術師は下がれ！　我らはヘッドレスを包囲するぞ！」

堕噛（オチガミ）が、声なき叫びと共に迫りくる。その右手に握るのは巨大な鉄塊の剣。人ならば持ち上げることすら数人がかりとなりそうな代物を引きずりながら迫りくるその姿は、魔術を無効化したことも相まって恐怖心を煽る要因となる。スティリアの檄を飛ばすような指示に彼らは一応の平静を取り戻し、指示の通りに堕噛を取り囲んだ。

後退する魔術師の中から一歩、アルナが歩み出て姉に向かって叫んだ。

「堕噛の体表についてるのは、多分変質した魔石よ！　その影響で

厚い神秘層（ベール）をまとってるみたい、多分殆ど魔術は通らないわ！！」

「■◆■！！！」

彼女の叫び声をかき消すように、堕噛がその鉄塊を地面に強く叩き付けた。人には扱うことなど不可能な質量と常識はずれの膂力が合わさることで、轟音と共に地面の表面が破砕、それは轟音と共に石片をまき散らす。

その一振りが物語るその威力。まともに受けずとも人間であれば軽々と屠られていくであろうことが予測でき、対峙する騎士たちはその顔を青ざめさせる。

「っく！？　なんて馬鹿力だ。あんなの受けたら武器ごと潰されちまうんじゃねぇ」

騎士の一人が、堕噛のその理不尽な肉体性能に悪態をつく。自分がまだ新米騎士だったころに同じ感想を抱いたこともあるスティリアが、攻撃範囲内に入らないようにと指示を出した。

だが、それでは堕噛に攻撃を加えることはできない。頭の無いままに2メートル半にまで肥大化した元人間である魔獣は、やりを装備する騎士たちよりも長大な攻撃範囲を誇る。防ぐことのできない攻撃を、回避に徹するしかなかった。

取り囲んだ別の騎士が後方から攻撃のそぶりを見せる。するとそれが見えているかのように敵は振り返り、その勢いで鉄塊を振り払う。風を薙ぐ轟音と共に振り払われるそれを、予期していたように騎士は回避した。

「奴との交戦経験があるのが約半数……でも昔は攻撃魔術が通用したから何とかなってた……」

堕噛をその場に食い止めるような陣形を組み、攻撃を，装う，ローテーションに加わりながら、スティリアは思考する。既に堕噛との交戦経験のない騎士たちは後方に下げ魔術師たちの護衛につかせている。

今のところ（施設での犠牲者を除き）犠牲は出ていない。今はまだ大丈夫だが、共振現象で圧迫されていく精神は、普段よりも格段に早く体力を削っていく。

今は興奮状態で大丈夫そうだが、魔術師たちの精神状態は恐らくこれ以上の戦闘に耐えられない。騎士団は、射程外からの攻撃という集団を失った状態で、堕噛（オチガミ）と対峙しなくてはいけない状況に追い込まれていた。想定外すぎる事態である。

「あね……団長！　このままでは我々がもちません！」

次第に他の騎士たちからも悲鳴に似た叫びがあがってくる。次第に動きも鈍くなってきていた。

だというのに、あの大質量の剣を振り回しているというのに、いっこうに堕噛（オチガミ）は疲労を見せる様子が無い。

「くそ、バケモノめ！」

そう、悪態をついた時だった。堕噛を取り囲む騎士たちの環の外から、何かが投げ込まれたのである。それは黄色の光を放つ小さな石で、転がり止まった先は堕噛の足元であった。光を放つそれは地面にしみ込むように溶けていった。瞬く間にそれは魔法陣を描き出す。

「みんな！　一旦下がって！」

後方から聞こえた叫び声、それに振り返る間もなく、その魔法陣

を中心に地面が崩壊した。

「■◆■■■！？」

投げ込まれた魔石のすぐ近くにあった堕噛の右足が、その崩壊した地面に飲み込まれる。急に崩れていった足場に反応しきれない堕噛は、その姿勢を崩して前のめりに倒れこみそうになる。

「直接魔術が効かなくたって、間接的になら！　今よ、お姉ちゃん！！」

突然のことに動きが固まっていたスティリアが、アルナの叫びに呼応して指示を出す。

「総員、やれぇ！」

騎士たちが一斉に堕噛に躍り掛かる。四方八方から迫りくる穂先たち。堕噛はそれを右手に持った鉄塊で振り払うが、足を陥没した地面にとられていては後方まで手は届かない。防ぎきれなかった幾本もの槍が、堕噛に傷をつける。

だが、堕噛の体から生えるようにして存在する結晶質が、騎士たちの攻撃を防ぐ鎧となる。

「っく、刃が通らねぇ！？」

「隙間をつけ！　奴が立ち上がりきる前に何としても深手を与えるんだよ！！　アルナ、あまり前に出ないで！！　巻き込まれるよ！」

「直接きかないだけなんだから、幾らでもやりようはあるわ！　皆、私の前を開けなさい！　巻き込まれるわよ！　Ｏｌ　Ｗｅｎｄｉｓ

ｓａ，ｓｕｋｏｌｕｒｉｏｅｓｓａ　ｅｌ　ｓｉｃｌｍ（その水面、円（まどか）に降り注いで）」

後方の集団から前に走り出たアルナが、宙に魔石を放り投げる。愛用する杖を掲げ魔石を指すと、それは青い輝きを放って砕け散り、中空に地面に向いた陣を描き出した。その生成を見届けて、彼女は勢いよく杖を振り下ろす。

「あの子は何を……総員、アルナの魔術に合わせて攻撃しろ！　ほら右翼ビビってないで！　あたしに続いて足止めに加わりなさい！！」

アルナの魔法陣から生まれた水の刃が、地面を抉るように閃く。眼前にできた幾本ものラインに杖を向けると、緑に輝く魔石を胸元に握りしめながら呟いた。

「Ａｐｔｕｎｔ　ｅｉｌ　ａｉｗｏｎｅ　ｋｌａｓｉｃａ（舞いてと願いては）　Ｒｉｌｚｅ　ｄａｋｍ（昏くして）」

石がひび割れ、擦れる音が響く。アルナの詠唱と共に、切り取られた地面が浮かび上がりそれは空高く舞い上がった。切り取られた後の地面が深くえぐれている。

大きく切り取られたその岩はある程度の高さで停止した。詠唱を完了させたアルナの、その杖が堕噛に向けられる。

「Ｖｒｅｄａ（放て）！！」

「■■！！！！」

アルナの叫びと、堕噛が態勢をたてなおすのはほぼ同時だった。

堕噛の左から迫りくる岩塊、それを敵は打ち落とそうとはせずに、腕で身を守るような態勢をとった。
岩塊が、重苦しい音をたてて堕噛に衝突する。その衝撃は甚大であることが容易に想像でき、受け止めた左腕の結晶質があたりにばら撒かれる。大きくその巨体が揺らいで、後方に倒れこむ、そのように思われた。

「■◆◆◆◆◆！！！！！」

「うおわぁ！？」

受け止めた岩塊を、堕噛が振り払った。石片をまき散らしながら飛び散りるそれは、周囲を取り囲んでいた騎士を巻き込みかける。辛うじてその範囲内に居た騎士たちは回避することが出来た。

「流石に物理的的な攻撃で倒すのは難しいみたいね……っ！？！？」

アルナが次の魔術を放とうと懐から魔石を取り出したその時、その表情が凍り付く。固まったまま、彼女の手から魔石が転がり落ちた。
ゆっくりと、堕噛はその体の向きを変える。妹の異変にいち早く気づいたスティリアは、状況を誰よりも早く理解した。

「――――――」

「は……目標をアルナに変えた！？」

堕噛の最大の特徴とも言われている共振現象。強い感情と魔力との共振によって引き起こされるそれは、対象に強い感情をぶつけることが出来る。堕噛の場合は、むき出しにされた‘食欲’。強い嫌

悪感を与え、時には気絶するものが居るほどの強い感情は、攻撃対象に特に強くむけられる。
予期せずして強まったその純粋すぎる感情に、過去幾人もの人間が足をすくませ、餌食となっていった。
それが今、アルナに適用されようとしている。スティリアは駆け出した。

「アルナはやらせない！！」

第三小節「あなたはだれ？」

「止まれぇ！！」

反撃を受ける可能性を厭わず、スティリアはその槍を大きく振りかぶる。そしてその切先で切りつけるように、落噛の右足めがけて振り抜いた。

「姉御！！　危険です！　下がってください！」

「ここで注意を惹かなきゃ……アルナが危ないでしょうが！」

団員の言葉に、スティリアは叫び返す。彼女は立て続けに攻撃を繰り出し、堕噛が反撃に移るまでに二度の刺突と一度の斬撃を追加していた。

攻撃対象を元々定めていたせいか、堕噛の反応は遅れる。振り向きざまの一撃はやすやすと回避された。

「そうよ、こっちに来なさい。あんたの相手はあたしだよ！」

挑発するように攻撃を仕掛けようとするスティリアに対し、堕噛はその手に持つ鉄塊を振り回して応える。守りに秀でた技術が発達する教会騎士の人間であっても、その攻撃を受けることは不可能に等しい。

疲労を知らないかのように繰り出される鉄塊の攻撃に、スティリアは舌打ちをするしかなかった。一撃が地面を砕くその攻撃に、正面から対峙することは称賛に値することであったが、反撃を繰り出せずにいた。

「お、おねぇちゃん！」

「導師、姉御は私たちが援護します！　貴女は後方に下がってください。我々では盾になることはできません！」

スティリアに遅れて追いついた騎士たちが、彼女を援護しようと取り囲むように陣形を組みはじめる。同時にその中から一人が歩み出て、アルナを後方に退かせようとした――その時だった。

スティリアの焦った表情がアルナの目に入り、急いた声が耳に入る。

「バカ！　前に出すぎだ、退けぇ！！」

スティリアと同じように奇襲をかけようとでもしたのだろうか。一人の騎士が、堕噛の背後から攻撃を仕掛けようと大きく踏み出していた。それは自身の得物の攻撃範囲内、だが同時に、それは堕噛の攻撃範囲内でもあった。

「◆■！！」

特に大きな隙を見せているわけでも無かった堕噛は、その背後の騎士の行動に反応し振り向いた。自身に迫る槍の穂先を、その左腕で振り払う。少しばかり傷こそついたものの、その槍は振り払われたことにより大きく弾かれた。騎士の手から離れるほどに。

「あ……」

呆然とする騎士。その圧倒的重量の得物を振り上げる堕噛。

「うあああぁぁぁ！！」

振り下ろされる大剣を、地を転がるように避ける。地面に倒れこんだその騎士は、恐怖と焦燥からか、上手く立つことが出来ないで、だが必死に堕噛から遠ざかろうともがく。それを追うようにまた鉄塊の大剣を振り上げる堕噛の背後からは、仲間の騎士たちが先ほどその騎士がしたように踏込をかけるが、それに堕噛は一向に反応しない。

「くそぉ！」

騎士の一人が、半ば自棄になったかのようにその槍を堕噛に向かって投げつけた。だがそれは振るわれた鉄塊に容易く阻まれる。

そしてついに、堕噛はその騎士を捉えた。

「あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

恐怖に叫んだ騎士の、その叫びが途絶える。圧倒的握力に頭部を握り潰されたのだ。

頭蓋が砕ける音が聞こえ、脳髄が水溜りに音をたてて滴る。その光景に、騎士（騎士）は凍りついた。

潰した獲物を、その胸を鷲掴みにして頭部の拘束具の真上まで持ってくる――――そして握り潰した体から噴出した血液を、その拘束具に塗りつけたのだ。

まるで上向きに開いた口に食べ物を詰め込むかのように、堕噛（オチガミ）はその血液を拘束具に塗り手繰る。だがそうして摂取することの出来ない血液たちは、巨躯を伝ってその足元に赤の水溜りを作っていった。

これが、堕噛（オチガミ）の食事。その名が‘噛むことを堕ちた’の文字を取

る所以(ゆえん)。その食事は、体内の消化器官を使って行われるのでは無い。本来あるはずの頭部を封印した拘束具から、血液中の微量な成分を魔術的に摂取するという、非効率極まりない手法で行われるのだ。

だが元は人間…故に彼らはそれで空腹を満たす感覚を得ることが出来ない。食べた感覚があるだけで、満ちることの無い…いやさらに強くなる空腹。洗脳ではなく、そうした本能を極限まで実用的に、戦闘向きになるように作られたのが、この堕噛(オチガミ)なのだ。

その食事光景を目の当たりにして、背後では嗚咽する声が聞こえる。実際に堕噛(オチガミ)と戦闘していた騎士たちにも、その動揺は広がっていた———致命的なまでに。

「う、うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

その食事光景を見て、次は自分だとでも思ったのだろう。食事中の堕噛(オチガミ)に一人の騎士が攻撃を仕掛けたのだ。だがそれは、非常に拙い事態だった。

「馬鹿！！　止めろ！　今攻撃を仕掛けたら？？？？？」

その言葉は最後まで紡がれる事は無かった。

「ｋａｔｕｋｅ　ｋａｔｕｋｅ，ｋｉｔｉｃｈｅｔｏ（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）……ｋａｔｕｋｅ　ｋａｔｕｋｅ，ｋｉｔｉｃｈｅｔｏ（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）…」

「ｋａｔｕｋｅ　ｋａｔｕｋｅ，ｋｉｔｉｃｈｅｔｏ（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）……ｋａｔｕｋｅ　ｋａｔｕｋｅ，ｋｉｔｉｃｈｅｔｏ（喰らえよ喰らえ、我等を満たせ）…」

それまで沈黙していた己憂(コウベ)部たちが、突如襲い掛かってきたのだ。

――――――――――――

「ウ――――！」

騎士につれられて後方に戻ったアルナ。その傍らの魔術師が、胃の中のものを地面にこぼす。堕噛（オチガミ）の食事光景を見る彼女は、顔面蒼白で唇を強く結び、手に持つ杖を抱きしめた。

その恐怖に、逃げ出したいと誰もが思った。だが周囲は目視するだけで三桁は居る己憂（コウベ）部たち。ここの一団が一塊になろうとも抜け出せる包囲では無い。

その事実に、一人恐慌した騎士が居た。食事中の堕噛（オチガミ）に襲い掛かったのだ。その光景に、アルナを始め魔術師たちは心臓が止まったように思った。

堕噛（オチガミ）。その行動理念は全て食欲に起因する。ヤツは自身の食事が邪魔されることを許さない――――ではどうするか…それは、己憂（コウベ）部に襲わせるという手段だった。

いままで静かに佇んでいたソレらが一斉に襲い来る。こちらの数十倍もの痩躯の尖兵が一斉に襲い掛かってきたのだ。

「う、来るな！　来るなぁ！！　来るなぁぁ！！！」

恐怖に顔を歪め、騎士達は剣を槍を振るい闇雲にそれらを打ち払う。一体一体の能力は（尻込みさえしなければ）新兵ほどの錬度で御釣りが来ると言われるほど弱いそれだが、次々に襲い来る物量に次第に押され始める。姉たちの方も、必死にそれらを振り払っていた。

「あぁぁぁぁぁ！？」

最早式を練り詠唱する余裕すら失った魔術師たちは、ただ恐慌するだけである。中には討ち漏れた己憂(コウベ)部に引き裂かれる者も居た。

その光景を、アルナは呆然と見ていた。叫ぶことも喚くことも恐怖に身を任せることもせず、ただただ固まって光景を見つめるだけだった。

ここで私は死んでしまうのだろうか？

そんな思いが頭を過ぎる

そんな時に、彼女の脳内に声が聞こえた。

『遠く向こう空の下、日は赤く沈んでく』

「え？」

突然聞こえた言葉…いや歌。それを耳にしたアルナは自身の現状も忘れて周囲を見渡す。気づくと、自分の足元が光っていた？？？？そこはどうやらこの遺跡の中心だったらしい。

『小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を見る。何処か違う別の場所、違う人が空を見る』

それは、いつだったか姉に連れて行って聞かされた教会？？？そこで聞かされた音楽に似たような旋律があったような気がした。だが歌詞に聞き覚えは無い。そもそも詠語でない歌詞を教会の人間は歌わない。

『時や場所や名前や歳や・・・みんな違っているけども、それでも

同じ夕日を眺めてる』

いや、かすかに詠語の歌詞の旋律も、少女の声と共に聞こえてくる。どうやら男の声が訳を同時に口ずさんでいるようだ。

気づかないうちに、アルナは地面に手を添えている。

『いつも隣に誰か居て、そう願いはしないけど』

(これは嘘でしょうね…貴女はきっと、誰かに側に居て欲しいのよ)

最早何故という思考も無い。恐怖に凍りついていたその心は、突然耳に聞こえてきた心地よい音に奪われていた。盲目的に、無思考に、それに意識を向けている。

『せめて同じ景色を眺めて欲しい、そんなささやかな願いだけ』

(寂しかったのかな? それだけでいいなんて…少し、可哀想)

視界が次第に光に包まれる。薄い青のその光は、いつもは頭上に広がっている蒼穹を連想させた。

意識が霞に、霧に、包まれる。

直後に流れてきた新たなメロディーに、頭に浮かんだ詩をのせて、口は勝手に紡ぎ出した。

「『今はまだ夢の中、あの日の空を夢見てる』」

脳裏に浮かんでくるのは、草原と蒼穹。

「『その中でいつまでも、ずっと空を眺めてた』」

そこで、一人の人物が仰向けになっているのが見える。だが認識があやふやで、容姿も性別も何もよくは分からない。

「『風に撫でられ目覚めると、まだ空を見上げてる』」

風が前から吹いてくる。視界が更に霞み、見ようとする姿を捉えきれない。

「『どこから夢であったのか、それを知ることは無理だから
ただ風の音に耳澄ます』」

ねぇ、アナタは誰？　その言葉を口にしようと思うが、思うように動いてくれない。糸で繰られたように、浮かんだ詩を音にすることしか出来ない。

「『風に運ばれるその歌は』」

光が更に強まる。視界はもう何も映さなくなっていた。

「『遠い故郷の童歌』」

それを最後に、全身にかかった糸が切れた気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7404y/

いつかどこかの俺の世界【影】

2011年12月12日00時47分発行